

## 「仕えるダビデ」(サムエル記上一六章一四〜二三節)

### 1 はじめての出会い

ダビデの生涯を辿る、子どもの聖書の学びは、始まったばかりです。先週サムエル記上一六章、その前半を通して知ることになったのは、少年ダビデが、王となるべき者として見いだされた、そのような者として油注ぎを受けた、預言者サムエルからそれを受けたということでした。

将来の主役がこうして決まったのはいいのですが、それはしかし、現に王である人、すなわち、サウルが、いま直ぐでなくても、王位から退けられるということを含んでいます。

いま直ぐでなくても、と申しましたが、しかしこれはイエスラエルの神、すなわち主、この主なる神が決定したことです。決定は不可逆です。結局のところ、イスラエル王国の歴史の中で、こうした神の決定が、現実につらぬかれていく。サウルは没落し、ダビデが台頭していきます。その葛藤の歴史がサムエル記上です。

サムエル記下は、三十歳で王に即位して(五・四)からのダビデの生涯を詳しく伝えていきます。その場合聖書は、これは前にも申し上げたことですが、そうしたダビデのような名君であつても、不都合なことを隠すことをしない。弱さを、罪を隠さない。そうしたことを抱えた者が、にもかかわらず神に愛され、救われる、そうした神の前の一人の人間を描いています。そこにいるのは、特別の人間ではない、昔の人間ではない、私どもと同じ一人の人間です。

神の決定がつらぬかれていく、といま申しましたが、ダビデ物語のこの段階で、少なくともダビデが、自分の行く末を知っていた、王になることを予想していたということはないと思います。

今日の聖書箇所、一六章の後半、ここに伝えられているのは、サウルとダビデの最初の直接の出会いですが、もしダビデが油注ぎの意味を知っていたなら、将来王になるのだと少しでも思っていたとしたら、王宮に出かけて行くことは、どんな理由があつてもなかった、むしろ警戒して、できるだけ近づかないようにしていたはずだと思ふからです。それだけにまことに不思議な導きによって、またもやダビデに白羽の矢が立ち、サウルを慰める人としていま王宮に関わり始めるのです。

### 2 苦しむサウル

ダビデは自分が油注がれたことの意味を弁えてはいなかった、そう考えてよいと思います。サウルも、王宮に連れてこられた一人の若者が、自分の後に王位に着くなどということとは、予想もしなかったことです。しかしサウルが感づいていたことがあります。それは神は自分を王位から退けた、簡単にいえば、自分は神から捨てられたということ、それは分かっていたと思います。

聖書はサウル王の様子を次のように描いています。

主の霊はサウルから離れ、主から来る悪霊が彼をさいなむようになった(一四節)。

サウル王はこの時まことに苦しみのどん底にありました。悪霊に悩まされています。夜も眠れない、心の緊張は解けず、少しも安まることがない。表情からは気が失われ、やつれ切っています。あちらこちらと痛みにも襲われていただろうと思います。それがくり返されていた。「さいなむ」というのは、くり返し襲うという意味です。何をもつてもいやされなかった。

いつからそうなったか、なぜそうなったか、サウル自身はよく知っていたと私は思います。そして聖書も、サウル王の苦しみの根本原因が何であったか、明らかにしています。それがこの一四節です。原因は主が彼を王位から退けた、「主の霊」が「サウルから離れ」たことにあります。

王というのは、サウルの場合もダビデの場合も、神の召し、選びがなければつとめることはできないものです。イスラエルの民も皆そう考えていました。民は王を求めました。しかしサウルを選んで、王としたのは主なる神であり、その思いを受けた預言者サムエルです。

サウルはもともと農民の子でしたが、だれよりも体が大きく強かったのです。じつさい彼はその力を振り、敵を打ち破り、国を富ませ、王様として期待に違わない働きをしてきました。そのようなサウルの晩年はしかし、サムエル記がこの後詳しく記していくことになるのですけれども、王としては悲惨ともいえるべきものでした。神から捨てられた、もう王はやっていけないと彼自身考えたのです。それで彼は苦しんでいたのです。神が味方としてついてくださっていると思えるなら、人はどんな試練を乗り越えることができます。しかし反対に神から捨てられたと思うなら、これほど苦しいことはないのです。

どうしてそうなったかサウル自身よく知っていたと申しました。彼は罪を犯したのです。簡単にいえば、神の命令に背いたのです(一三〜一五章)。聖書はそこに「叛逆」や「高慢」を見えています(一五・二三)。

その一つの例は、先週も取り上げた、ペリシテ人との戦いの中で、預言者サムエルから自分が来るまで七日間待つようにいわれていたにもかかわらず、サムエルが来なかったことで、自ら祭司として振る舞い、神に犠牲をささげ、戦勝祈願をしてしまったことです。じつさいサムエルは、サウルが献げ物をささげ終えたそのとき、到着しています(二三・一〇)。それは信仰の試みであったかもしれませんが。サウルはそれに失敗した。主の命令に従わなかったのです。

もう一つのこと、前の章(一五章)に書いてあります。サムエルを通して神はサウルに、アマレク人をすべて滅ぼすように命じられます。それこそ男も女も、子供も、牛馬などの家畜も、らくだもです。こうした皆殺しの神の命令の是非はともかく、彼はそれに聞き従わず、自分たちのために上等なものを残して、戦利品として分けようとしたのです。そのことをサムエルから問われ、主に献げるためにそうしたなどと彼は弁解しています(一五・一五)。結局彼は神のみ声に聞き従わなかった、その罪が

サムエルによって鋭く指摘されています。「主の御言葉を退けたあなたは、王位から退けられる」(一五・二三、一六)。

驚いたサウルは、立ち去ろうとするサムエルの上着の裾をつかんで、追いつがりますが、逆にサムエルは、王位はあなたから取り上げられる、そして「あなたよりすぐれた隣人に」与えられると宣言して去って行きます。悪霊に頻繁に襲われるようになったのはその時からです。不安な思いの中、気分がすぐれない日々が始まります。

### 3 慰める人

しかし今日の箇所が私どもに示しているのは、そのような、神に背き、神に捨てられたという思いの中で苦しむサウル王に、慰める者が遣わされたということです。それが一人の若者ダビデでした。

神の霊がサウルを襲うたびに、ダビデが傍らで堅琴を奏でると、サウルは心が安まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れた(二三節)。

ダビデは、音楽に秀でた青年でした。彼は王様を慰めるために連れてこられた。王はしばしば苦しみに襲われました。そしてその度ごとにこの青年が堅琴をかなでるのです。すると王の心は安らかになり、心の、体の痛みもとれたのです。ダビデはそうしてサウル王に仕えたのです。

「堅琴」と訳されているのは大型のハープではなくて、もとの言葉ではキンノールと呼ばれる、むろんたくさんの種類があったようですが、比較的小さな、携帯用に使われていた楽器です。

堅琴をかなで、ダビデは音楽をもってサウルを慰めました。音楽にそのような力があることは分かります。それは昔から認められていました。音楽のもついわば魔術的ともいべき力が人の霊に働きかけ、悪霊を追い出すというように考えられています。むろんここでもそう理解して間違いではありませんが、それだけではないと思います。むしろ苦悩のどん底にあつてサウルがいま本当に必要としていたものを、ダビデの音楽はもたらしたと考えるべきです。それは何か。それは、そのように神に捨てられたという思いの中で苦悩するサウルに、その苦しみも決して神の知らないことではない、そこにも神はおられるということ、明らかにするものでなければならなかったと思うのです。

それを考えるために、この箇所にくり返し現れる「主から来る悪霊」(一四節)とか「神からの悪霊」(一五、一六節)あるいは「神の霊がサウルを襲うたびに」(二三節)といった言い方に注意しておくべきです。つまり、神が悪霊を送る、そして苦しめるというのではなくて、いまサウルを苦しめている悪霊も神のご支配、神の御手の中にあるということです。

神はこの苦しみの中でも共におられる、ダビデの奏でる音楽はそのような思いをし、ばしサウルにもたらしたのでした。神が共におられるというメッセージとなって、ダビ

デの豎琴は、サウルの魂に届いたのです。

どうしてダビデの豎琴はそのような慰めとなりえたのでしょうか。ダビデを推薦したサウルの家来の言葉に注意したいと思います。

わたしが会ったベツレヘムの人エツサイの息子は豎琴を巧みに奏でるうえに、勇敢な戦士で、戦術の心得もあり、しかも、言葉に分別があつて外見もよく、まさに主が共におられる人です（一八節）。

この最後のところ、「まさに主が共におられる人」に注目して、これだけは「外からは見えない性質」と説明している人がいます。その通りです。それはまさに外からは見えない人の性質です。

ダビデの奏でる豎琴が、サウルの心を慰めていたとしたら、それはまさにダビデとは「主が共におられる人」であつたからです。主なる神ご自身が、ダビデその人によつて、その音楽を通して、慰めを語り、慰めをもたらしていた。神ご自身が、ダビデの豎琴によつて、共にいることを証したのです。悪霊はサウルを離れます。こうして、神に捨てられたという思いの中で苦悩していたサウルを、神ご自身が慰めてくださったのです。

主が共におられる人、神が共におられる人、それは私どもにとってイエス・キリストその方のことでもあるのではないでしょうか。それゆえイエス・キリストと共にあるならば、いつでも、どんな時でも、「死の陰の谷を行くときも」（詩二三）、神は聖霊によつて私どもと共にいまし、慰めてくださるのです。

ところで今日の聖書箇所は、教会暦で復活後第四主日「うたえ」（カンターテ）にしばしば読まれる箇所でもあります。

ダビデの豎琴と同じように、私どもの賛美の声、賛美の歌も、神が私どもと共にいますことを証します。キリストを証します。そしてそれゆえに歌う者にも聞く者にもそれによつて平安と慰めが与えられます。福音書が伝える地上のイエスの最後の説教を思い起こします。

わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな（ヨハネ福音書一四・二七）。

賛美の声、賛美の歌によつても、私どもに平和と平安がもたらされます。このキリストの平和・平安があればこそ、私どもは、どのような時も、どのような場合でも「心騒がせる」ことなく「おびえることなく」、神の慰めのうちに、歩んでいくことができるのです。